

# 第二章 縄文時代

## 第一節 縄文時代の概要

縄文時代は「水田稲作以前の、土器をもつ採集を中心とした時代」（土器が出現した段階を縄文時代草創期のはじめと考える場合）である。旧石器時代にはなかった「土器」の発明により、生活が大きく変化した。そのままでは食べられない植物を煮ることによって食用可能にして、栄養や健康面にも大きな影響を与えた。

さらに、気候の温暖化に伴い、植生も針葉樹林から、ブナ・ナラ・クリなどの落葉広葉樹林に変わり始め、ナウマンゾウが二万年前には絶滅したほか、オオツノジカなどの大型動物も絶滅し、狩りはシカやイノシシのほか、キツネやタヌキ、ウサギなどの中・小型動物が対象となった。動植物相の変化をうけて、植物質食糧や海産物など、さまざまな資源を利用するようになる。その結果、土器の普及や弓矢の使用が進められ、食糧を得る技術と、調理して保存する技術が向上することになる。そして生活に余裕が生まれ、人口の増加や定住生活もたらされることとなる。

縄文時代は一万年以上続いたが、出土する土器型式（土器の形）に基づいて、六時期（草創期・早期・前期・中期・後期・晩期）に区切られている。この年代区分は相対的（相対年代）であり、時間が均等には扱われていない。土器型式による時代区分である土器編年については、206ページにて解説する。具体的に〇〇年前という年代は、実年代と呼ばれ、この数字は放射性炭素年代を年輪年代と対比させた較正年代に基づいて表現されることが多い（本章第七節コ

ラム）。

今から約一万五八〇〇年前に、縄文時代が始まった。縄文時代最古の段階を縄文時代草創期と呼ぶ。土器成立期の系譜関係については、未だ明らかになっていないが、草創期の遺跡は九州薩南諸島から青森県まで広く分布している。この時期に縄文文化の基礎が形作られたと考えられる。今のところ、日本で最古の土器と判明しているものは青森県大平山元I遺跡出土の無文土器である。北部九州地域でも長崎県の福井洞穴や泉福寺洞穴など、同じ頃から土器の作成が始まっていたことが指摘されている。土器成立期段階では、集落の構造はまだまだ見えて来ず、草創期の終わりごろ、一万二五〇〇年前ごろになると集落が形成され、定住という生活形態が作られ始める。その段階の遺跡の一つが、富士宮市に位置する大鹿窪遺跡である。この時期はまだ人口密度が低く、遺跡の利用期間は短い断続的な利用が想定されている。全国的にみても遺跡数は非常に少ないものの、この時期から、土器分布の広がりや列島全域に広がっていく。

草創期に続く時期は早期と呼ばれ、安定した温暖な気候の完新世を迎え、遺跡数が徐々に増加していく。早期になっても遺跡の継続性は低いままだが、一つの集団の中でも他地域の型式の土器が入り混じった形で作られるようになり、人の流れが活発になっていっていることがうかがえる。

早期後半から前期にかけて、地球温暖化が進むことによって、縄

文海進と呼ばれる海面の上昇が見られるようになる。縄文海進によって、貝類の生息地や魚の獲れる入り江が広がり、漁場としての開拓が進むこととなる。早期後半から本格的に貝塚が形成され始め、前期になると、海岸部に集落が多く進出することとなる。

一方、九州では、約七三〇〇年前に薩摩半島の南方約六〇kmの海底にある鬼界カルデラの大爆発によって、全国的にこの火山灰（アカホヤ）が降下することになる。

漁獵文化が栄えると同時に、大形の環状集落が関東地方を中心として形成され始める。これらの多くは縄文海進によって形成された内湾に沿った台地上に形成されたが、沿岸部だけにとどまらず、内陸部にも形成される。各地で集落の規模が大きくなり、遺跡の継続性が認められるようになる。

中期になると関東・中部高地を中心に遺跡数が爆発的に増加し、各地で裝飾性の高い土器が作られはじめる。しかしながら、人口が増えることによって、食糧資源が枯渇し、他地域への人の流出による人口減少につながることもなる。

後期になると、裝飾性の高い土器は徐々に衰退を迎え、繊細な文様や調整を施した精製土器と比較的粗雑なつくりの粗製土器の分化が進んでくる。また、集落規模も徐々に縮小していき、晩期になると日本各地で集落の縮小、分散化といった傾向が顕著にみられるようになる。

後期・晩期になると、主に東日本において、祭祀に関わると考えられる特殊な遺物や遺構が増加してくる。このことから、一集落単位での生活が主体であった時期が終わり、複数の集落による共同体の形成が始まったことが分かる。

縄文時代には農耕は存在しないとされるが、芋掘り用の道具として使われていたと考えられる石器（打製石斧）の出土や植物の圧痕

が残る土器などから、縄文時代における植物栽培も明らかにってきている。ダイズ属・アズキ亜属・シソ属・エゴマは、縄文時代のほぼ全時期を通して圧痕が確認されている。さらに、縄文人によく食されていたクリの木も、管理栽培されていた可能性が指摘されている。縄文時代における植物栽培は、鳥浜貝塚（福井県若狭町）の発掘事例から古くは早期までさかのぼる可能性がある。しかしながら、縄文人の生活を支える程度にまでは至らなかったことが、弥生時代の農耕との大きな違いと考えられている。

晩期になると、縄文土器の器形にも変化が訪れ、壺や高坏といった形の土器も作られるようになり、食生活が多様化したことがわかる。そして、北部九州から伝わった大陸文化によって次第に水田稲作が始まり、弥生時代が幕を開けることとなる。

次節からは各時代の静岡県域と富士宮市域における特質を紹介する。

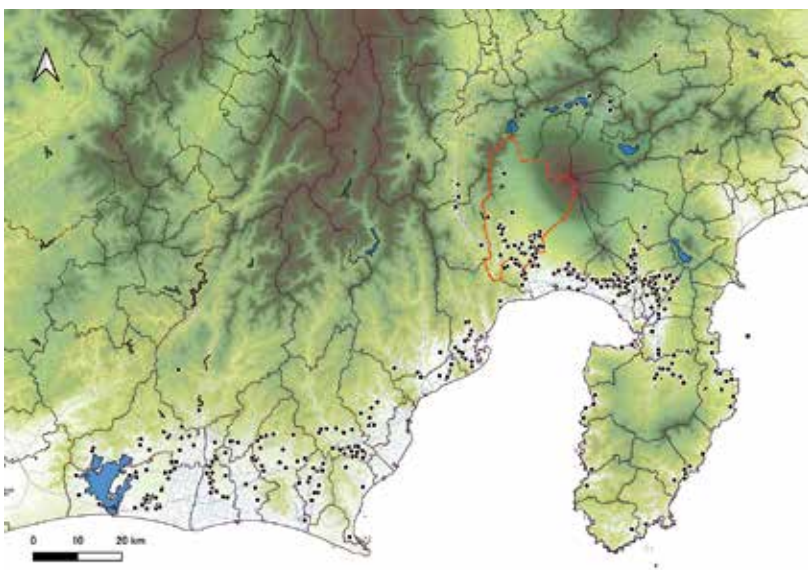


図 2-1 縄文遺跡分布図

## 第二節 静岡県と富士宮市の縄文時代

### 静岡県内の縄文遺跡 (図2-1)

草創期の遺跡に関しては、東部地域の富士宮市・沼津市・長泉町・三島市・裾野市・函南町・伊豆の国市でみられ、中部域では島田市でのみ見つかった。分布の傾向は、丘陵や山の裾野部分に位置するものが多い。愛鷹山周辺には後期旧石器時代の遺跡も多く見つかっており、前時代からの継続性もうかがえる。

早期になると、県内全域で遺跡の分布がみられるようになる。早期前半の撚糸文土器よりいともんから押型文土器おしがたもんの時期は、東部域に遺跡が多く分布し、県西部でも少量の押型文土器とそれに伴う撚糸文土器が見つかっている。早期後半の条痕文系じょうこんめんの土器を伴う遺跡は、東部域の特に愛鷹山の裾野部分に集中して分布がみられる。

前期も早期の遺跡分布と状況はあまり変わらず、県東部に分布が集中し、西部の丘陵沿いにも遺跡が点在する。前期前葉から中葉までは関東系の土器の出土が多くみられるが、前期末ごろになると関西系の土器がこれに多く混じるようになってくる。西日本との交流がこのころから活発になってくる。

中期になると県内全域で遺跡数が急増する。これまで遺跡が分布していたエリアに加えて、その周辺地域にも遺跡が分布するようになる。分布の集中箇所は、やはり東部地域と西部の天竜川周辺になる。特に西部地域では中期初頭の東海系の土器が多く出土する。東部地域では信州系の土器が多くみられることから、交流のルートが異なっていた可能性がある。

後期になると、徐々に県内の遺跡分布に変化が生まれてくる。後期後半になると東部地域では遺跡数が減少し、逆に西部地域では遺跡数が増加してくる。特に、県西部では浜松市の蜷塚遺跡ヒナづかや磐田市



BP: 1950年を起点として何年前かを示す。暦年代については、小林謙一2017『縄文時代の実年代』同成社に準拠

の西貝塚・見性寺貝塚、袋井市の大畑貝塚をはじめとした貝塚が形成され始める。

晩期になると、県東部に多く分布していた遺跡がほとんど見られなくなり、県西部や中部に集中して見られるようになる。遺跡の分布から、標高の高い場所から低い場所へ居住域を移していったものと考えられる。西部地域で出土している蜆塚B式と呼ばれる土器群の文様構成や胎土から、時代が徐々に弥生時代へ移り変わっていく様相がうかがえる。

以上が静岡県内の縄文時代の様相である。これを踏まえて富士宮市の遺跡分布の傾向を見ていく。

### 富士宮市内の縄文遺跡

市内にも、数多くの縄文遺跡が分布しており、縄文時代中期後半から後期後葉までの遺跡が大半を占めている。

富士宮市は富士山西南麓に位置するため、縄文時代にも富士山の噴火活動の影響を少なからず受けているが、偏西風によって火山噴出物の多くは富士山東部地域に主に降り注ぐため、富士山の麓に位置するにもかかわらず、火山灰の堆積は実はそれほど厚くない。また、市内において縄文文化が栄える以前は、富士山の溶岩流が広い範囲で流れ込んできているが、縄文文化開始後には溶岩流による被害はあまり受けていない。富士山が間近にある立地にもかかわらず、富士山の噴火活動による影響が少ないことが、この地域で縄文文化が栄えた要因の一つなのかもしれない。

富士宮市では、主に富士川・潤井川・芝川流域に遺跡分布がみられ、中部高地や関東地域の影響を受けた土器が出土していることや、伊豆神津島産や長野産の黒曜石製石器が出土していることから、河川を利用した他地域との交流も考えられる。

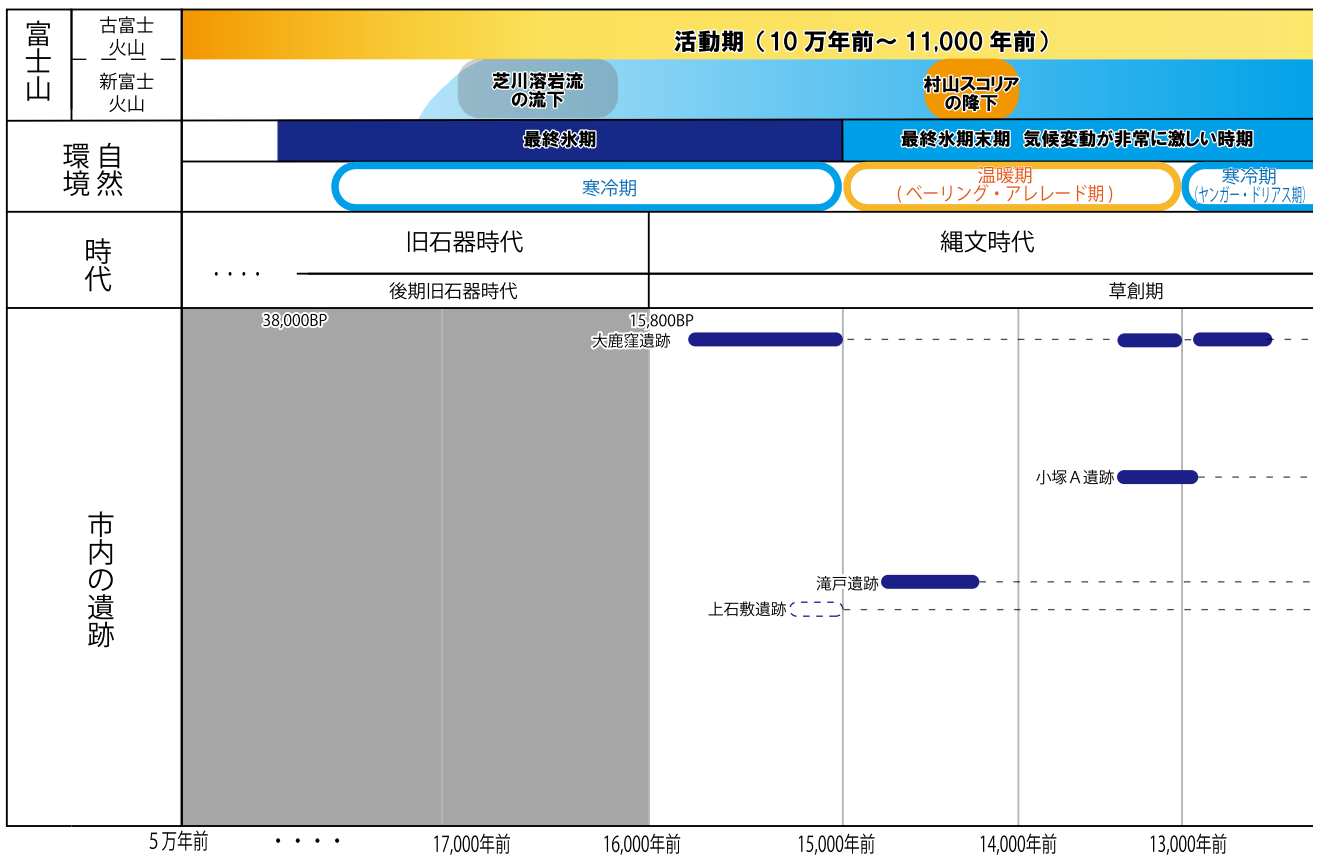


図 2-2 富士宮市の主要縄文遺跡

### 第三節 富士宮市の縄文時代草創期

縄文時代の始まりである草創期には、古富士火山と新富士火山が同時に存在していたとされる。縄文時代草創期のはじめには、新富士火山が噴火しており、市内広域から富士山の火山噴出物が見つかっている。

草創期初期段階（一万五〇〇〇～一万三〇〇〇年前）は晩水期温暖期（ベーリング・アレレード期）にあたる。地球規模に気候が温暖になるこの頃には、日本列島全体で遺跡数が増加していく。地域差はあるものの、九州薩南諸島から青森まで、遺跡の分布がみられる。温暖化によって果実や木の実などの植物質食料を安定して得ることができるようになり、人々は次第に同じ場所に留まって生活をするようになるのである。

草創期後半段階（一万三〇〇〇～一万一七〇〇年前ごろ）は、これまでの温暖だった気候が一気に寒冷になった（ヤンガー・ドリラス期）。そのため、気候変動による災害が各所で起き、日本全体で遺跡数が激減する。やがて氷期が終わり、早期（一万一五〇〇年前ごろ）に入ると気候変動の少ない温暖な気候になり、安定した生活を送ることができるようになることで、生活構造が確立していくのである。

草創期は縄文時代のほかのどの時期にもみられないような大きな環境変化があった時期であり、人々は非常に厳しい環境の



写真 2-1 大鹿窪遺跡遠景

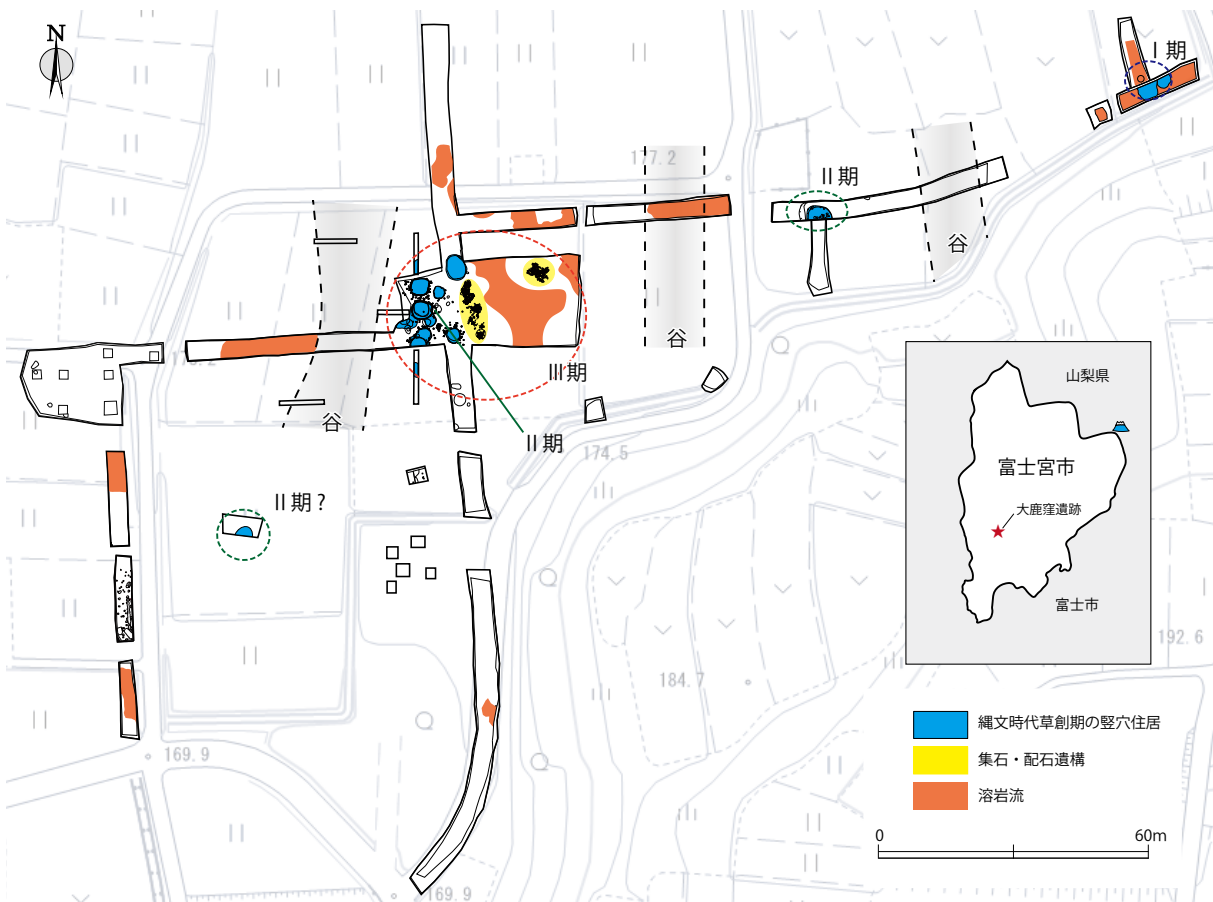


図 2-3 大鹿窪遺跡調査区全体

中で安定した生活を模索していた。その中で、複数の住居と集石・配石などの構造物が配置された「集落」を形成した大鹿窪遺跡は、ほかに先駆けて安定した生活をはじめた遺跡と考えられている。

大鹿窪遺跡は、市内大鹿窪に所在する、縄文時代草創期～早期の集落遺跡である。ほ場整備事業に伴って、平成一三年（二〇〇一）緊急発掘調査が行われた。発掘当時は、記録保存を行った後、遺跡は壊される予定だったが、その重要性から遺跡は地中保護されることになった。

その後、縄文時代初期の定住開始段階における集落構造を知ろうえで非常に貴重な遺跡であるとして、平成二〇年（二〇〇八）三月、国史跡に指定された。

大鹿窪遺跡から見つかった遺構について、縄文時代草創期と考えられるものは、竪穴住居一五基・竪穴状遺構二基・炉穴二基・集石遺構一四基・配石遺構八基・土坑九基（令和三年（二〇二一）三月時点）が検出されている。

これらの草創期の遺構は三つの時期に分けることができる。

- ①縄文時代草創期の最古段階に位置すると考えられ、土器を伴わず槍先型尖頭器やぶりきかたせんとうきが出土する段階（Ⅰ期）。
- ②縄文時代草創期中葉の隆線文土器りゅうせんもんおよび微隆起線文土器びりゅうきせんもんが出土する段階（Ⅱ期）。
- ③縄文時代草創期の集落が形成される段階であり、押圧縄文土器おうえつじょうもんや薄手爪形文土器うすでつめがたもん、石鏃せきさくなどが多く出土する段階（Ⅲ期）。

Ⅲ期の集落跡から見つかった竪穴住居跡群は馬蹄形ばていけいに配されており、その中の広場から土坑、集石・配石遺構が見つかっている。遺構から出土した土器の多くが押圧縄文土器であり、この形の土器が

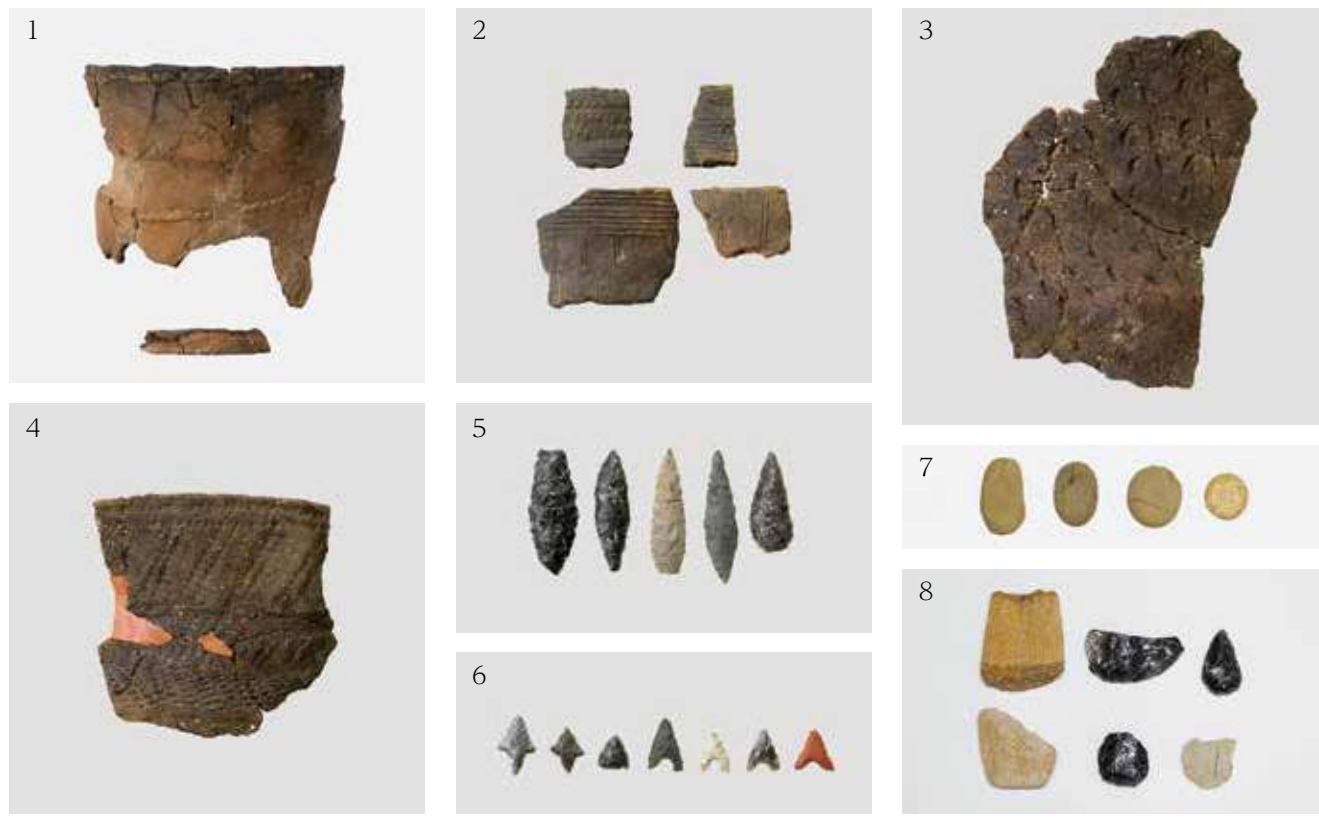


写真 2-2 大鹿窪遺跡出土遺物

- 1 隆線文土器 2 微隆起線文土器 3 爪形文土器 4 押圧縄文土器 5 槍先型尖頭器 6 有舌尖頭器・石鏃
- 7 磨石・敲石類 8 矢柄研磨器・スクレーパー

使用された時に集落が営まれたと考えられている。

集落跡は、東側を富士山の溶岩流に、東西を谷状地形に挟まれているため、非常に狭い範囲で居住が繰り返されていたと考えられる。また、大鹿窪遺跡の集落に人が住んでいた時は、現在の新富士火山ができたばかりの頃で、遺跡からは古富士火山がまだ見える状態だったことが推測される。

大鹿窪遺跡の集落のすぐ東側には、新富士火山由来の溶岩流（芝川溶岩流）が広がっている。この溶岩流は集落がつくられるよりも前の約一万七〇〇〇年前に流れ込んだもので、集石遺構や配石遺構はこの溶岩の礫（れき）を利用して構築されている。さらに、遺跡の地形は、基盤にある溶岩の空洞が崩落したことによって形成され、この窪んだ地形を活かして集落にしていることがわかっている。近年の研究によって、大鹿窪遺跡が使われていた直前にも、富士山の噴火があった可能性が指摘されている。富士山から飛来したテフラ（火山噴出物）が、生活していた当時の床面の土から見つかっている。このテフラについては、村山スコリアと呼ばれ、約一万四〇〇〇年前〜一万三五〇〇年前に村山付近の噴火によって厚く積もった噴出物で、芝川溶岩流の時代かつ、集落形成以前に降下したものと考えられている。

また、草創期の人々が食糧としていたものについて、狩猟された動物や採取された植物が考えられるが、大鹿窪遺跡からは草創期後葉の年代が測定されたオニグルミが検出されており、この時期の食性の一端を示している可能性がある。

大鹿窪遺跡から出土した縄文時代草創期の土器としては、隆線文土器・微隆起線文土器・厚手爪形文土器・薄手爪形文土器・押圧縄文土器などがある（写真2-2）。

微隆起線文土器は、調査区東側（3-3E区）のみで出土し、隆



写真 2-4 小塚 A 遺跡出土尖頭器



写真 2-5 小塚 A 遺跡出土隆線文土器



写真 2-3 滝戸遺跡出土遺物

裏

- 1 隆線文土器・微隆起線文土器・捺糸文土器  
2 有舌尖頭器 3 スクレーパー類

線文土器は主として、調査区中央（3-1区）から出土している。微隆起線文土器は関東からの影響を示し、隆線文土器は南九州からの影響を示すものであるため、大鹿窪遺跡は東西の文化を併せ持つ遺跡であった可能性が考えられる。

市内には、ほかにも大鹿窪遺跡Ⅱ期と同様の遺物が、滝戸遺跡と小塚A遺跡で確認されている。

令和三年度に市内野中に位置する滝戸遺跡で行われた発掘調査では、大鹿窪遺跡でも確認された村山スコリア層の直上から草創期の遺物が出土している。大鹿窪遺跡で出土したものよりもやや古手の隆線文土器と微隆起線文土器が、ラウンドスクレーパーや有舌尖頭器と共に出土している（写真2-3）。

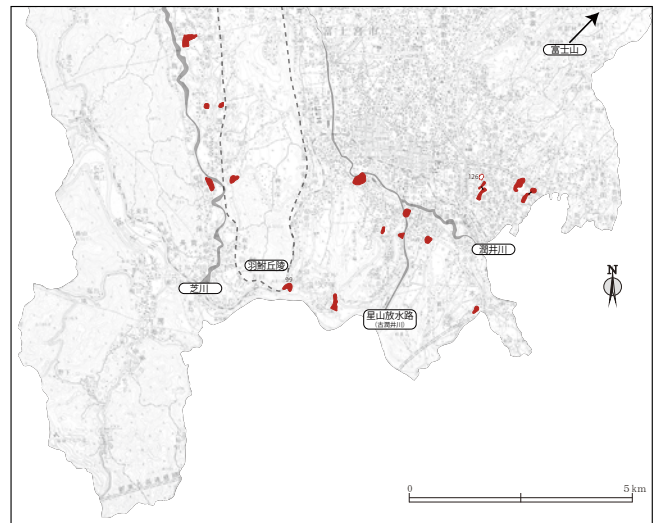
なお、大鹿窪遺跡と同じ芝川流域の遺跡である小塚A遺跡からも隆線文土器が出土している。大鹿窪遺跡から出土したものと比較すると隆線が細く、薄手の作りであり、胎土には黒雲母が大量に含まれることから隆線文土器の中でも新しいものと考えられる（写真2-5）。

大鹿窪遺跡Ⅱ期には、羽鮒丘陵の南端を回って芝川沿いの大鹿窪遺跡と小塚A遺跡までの人の移動が見えてくる（図2-4）。

大鹿窪遺跡から最も多く出土している押圧縄文土器は、沼津市の葛原第Ⅳ遺跡で確認されている葛原沢2式土器や、長野県木曾郡上松町のお宮の森裏遺跡出土の押圧縄文土器と類似した施文方法を用いており、近い時期に作られたものと考えられる。これらの遺跡に後続する遺跡としては、伊豆の国市の仲道A遺跡があげられる。しかしながら、仲道A遺跡から出土した押圧縄文土器は平底で、原体の半置反転施文や回転による施文が多い。したがって、異なった地域の影響を受けていることが想定され、その候補として群馬県の西鹿田中島遺跡の押圧縄文土器の系統をひいているものと考えられる。



写真 2-6 小松原A遺跡調査風景



遺跡番号	遺跡名	時期			
		後期旧石器	草創期		早期
194	下高原遺跡				
224	小塚A遺跡				
108	滝戸遺跡				
213	大鹿窪遺跡				
218	山崎遺跡				
219	小森遺跡				
227	向谷戸遺跡				
106	南部谷戸遺跡				
107	月の輪平遺跡				
126	上石敷遺跡				
99	小松原A遺跡				
9	若宮遺跡				
11	代官屋敷遺跡				
25	石敷遺跡				
95	沼久保坂上遺跡				
113	奥山地遺跡				
128	黒田向林遺跡				

図 2-4 草創期～早期遺跡分布

遺物・遺構の多い時期は色を濃く示している。

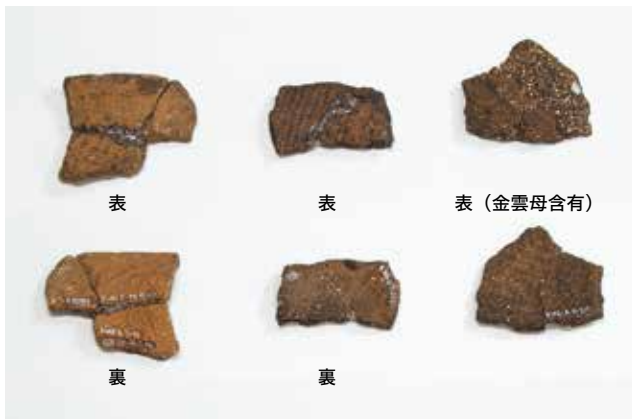


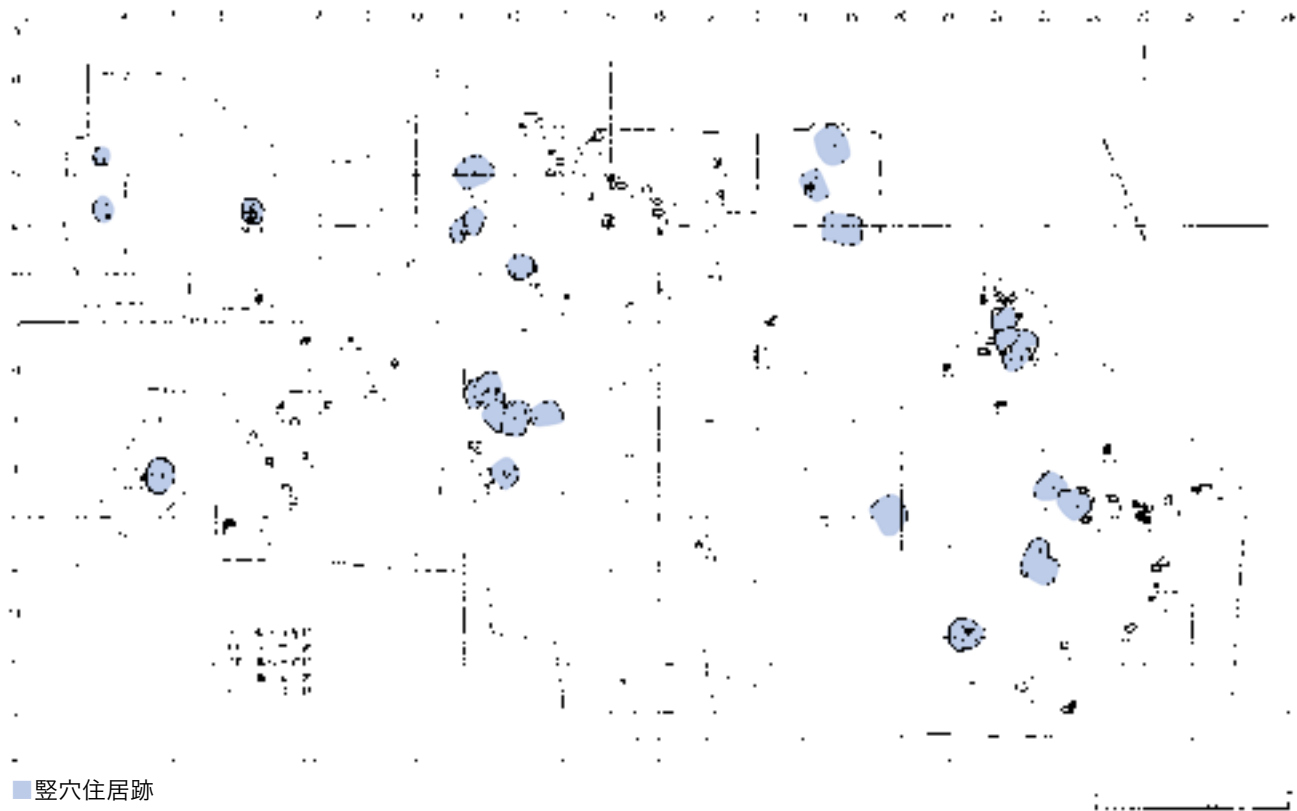
写真 2-7 小松原A遺跡出土表裏縄文土器

静岡県周辺では、押圧縄文土器が出土した遺跡数自体は少ないものの、長野県から静岡県東部地域までの南北のつながりが見えてくる。さらに、大鹿窪遺跡からは土器とともに石鏃・尖頭器・磨石・<sup>なま</sup>敲石など大量の石器も出土しており、狩猟と植物資源の採集を主に行っていたことがうかがえる。この時期に特徴的な槍先型尖頭器や有溝砥石<sup>ゆゆうと</sup>、ラウンドスクレーパーや有舌尖頭器も確認されている（写真2-2）。黒曜石製の石器も多く出土しており、神津島産（伊豆諸島）や柏峠産（伊東市）、信州産のものを使用しており、当時の物流ネットワークをうかがい知ることができる。

押圧縄文土器に続く表裏縄文土器は、大鹿窪遺跡からはほとんど出土しておらず、一点のみが確認されている。表裏縄文土器が多く出土している遺跡としては、小松原A遺跡（写真2-6・7）や若宮遺跡（図2-5）があげられる。

縄文時代草創期から早期に近づくにつれ、遺跡の分布が市内西部から市内南東部に移っていく。その中継地点である小松原A遺跡も富士宮の歴史を理解する上で非常に重要な遺跡である。

小松原A遺跡は、縄文草創期末から早期の遺跡で、J・R身延線沼久保駅の南の小松原台地の浅い谷に土器片が流れ込んでいる状況が確認された。土器片は縄文草創期末期の表裏縄文土器と早期の撚糸文土器、条痕文土器などである。表裏縄文土器は、土器の表裏に縄文が施され、大鹿窪遺跡の押圧縄文土器と同様に、胎土に黒雲母が多く含まれる特徴を持つ。表裏縄文土器は小泉の若宮遺跡から出土する最も古い土器型式で、小松原A遺跡のものよりやや新しい印象を受ける。縄文時代草創期から早期にかけて、当時の人々は、大鹿窪遺跡から羽耐丘陵の先端を回って富士山側に生活拠点を広げていったと考えられるのである。



■ 竪穴住居跡

図 2-5 若宮遺跡遺構全体図

## 第四節 富士宮市の縄文時代早期

縄文時代早期は、今から一万一五〇〇年前から七〇〇〇年前にあたる。気候が急激に暖かくなったため、海面が上昇し、地形や自然環境が大きく変わる時期である。新しい自然環境における動植物を食糧として活かし、より本格的な定住生活が始まる。

富士山周辺地域においても古富士火山の活動期が終了し、新富士火山の活動も比較的穏やかになっていくため、市内の遺跡数も徐々に増えていく。

市内で確認されている早期最古の土器は、滝戸遺跡出土の擦糸文土器の井草Ⅰ式土器である。黒雲母を多量に含み、口縁部はやや外湾する。富士宮市内から出土する擦糸文土器は、黒雲母を含む土器と、若宮遺跡で特徴的な軽しような胎土（火山灰質で容積重が小さい土）の二種類が確認されており、軽しような胎土の擦糸文土器の方が新手と考えられる。

若宮遺跡は、小泉若宮に位置する小高い丘陵から南向きの斜面一帯に広がる早期の大規模集落遺跡である。東西一二〇m、南北五〇mの範囲に竪穴住居跡二八棟・炉穴跡六〇基・集石土坑跡一三基などが発見され、発見当時は全国クラスの早期遺跡として注目された（図2-5、写真2-8）。発掘調査の結果、径二〜三mの小形の住居内に炉は築かれず、野外炉として炉穴や集石土坑、集石などで調理を行う早期集落の生活の様子が明らかになった。住居外に炉を持ち、寝床と調理場を分ける空間利用については、石敷遺跡や代官屋敷遺跡でも確認されている。

遺物は草創期末の表裏縄文土器から早期の擦糸文土器、格子目・山形・楕円などの押型文土器（写真2-9）や無文土器などの土器片、およそ一万五〇〇〇点が出土し、その出土量もさることながら、関



写真 2-10 石敷遺跡竪穴住居跡



写真 2-8 若宮遺跡調査区全景



写真 2-11 石敷遺跡出土土器（相木式）



写真 2-9 若宮遺跡出土土器（押型文土器）

東系の撚糸文化圏と中部系の押型文文化圏が重なり合った特徴的な遺跡として位置付けられている。

また、石器は有舌尖頭器、石鏃の狩猟器、石皿・磨石・凹石などの調理具、石斧・石匙・石錐などの工具が二七一五点出土し、この時期に縄文時代の石器の器種が確立されたことがうかがえる。中でも、出土した石器のうち八〇%を占めた石鏃の出土は、狩猟の方法が槍から弓矢に変化したことを物語っている。

縄文時代早期の人々の生活では、石器加工の場所と居住空間を分けていた可能性も考えられており、市内の事例としては、黒田向林遺跡があげられる。

黒田向林遺跡は、富士宮ゴルフクラブ（野中）東側の小高い丘陵の狭い東向き斜面に築かれた早期の遺跡である。狭い範囲に一〜二mほどの土坑跡三基と小礫の散布が発見された（図2-6）。調査区は四〇〇m<sup>2</sup>を対象としていたが、面積の割に多くの土器片や石器が出土した。特に一六四点の石鏃や敲石の存在から、石鏃の製作跡であったと考えられている。押型文土器期の後半に出現する大きな楕円文や、裏面に螺旋状の凹みを特徴とする高山寺式土器（写真2-12）の大型土器片も見つかっている。

高山寺式土器が作られる頃には市内の遺跡数は急激に増加して、黒田向林遺跡・若宮遺跡に加えて、小塚A遺跡・代官屋敷遺跡・石敷遺跡などがあげられる。撚糸文土器と高山寺式土器が並行していたことにより、撚糸文土器の器厚が非常に厚くなり、内面に凹線が施されるものが確認できるようになる。

押型文土器の後に出現する条痕文系土器は、石敷遺跡・代官屋敷遺跡・小塚A遺跡・大鹿窪遺跡などで見つかっており、前時期から継続している遺跡が多く見られる。このような傾向は県東部域で顕著であり、関東域からの人の流入が考えられる。



写真 2-12  
黒田向林遺跡出土土器（高山寺式）

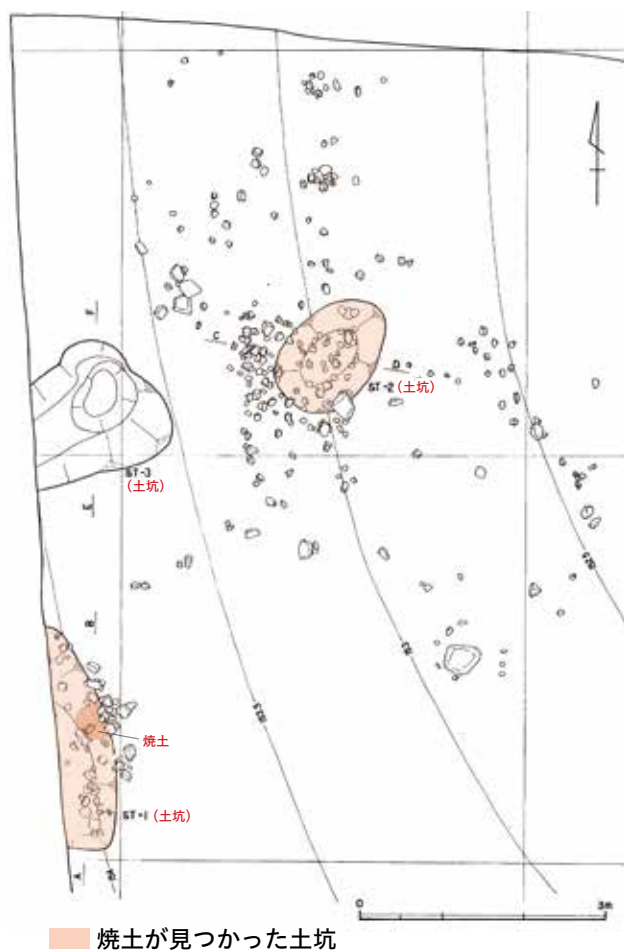


図 2-6 黒田向林遺跡平面図

## 第五節 富士宮市の縄文時代前期

縄文時代前期は、今から七〇〇〇年前から五五〇〇年前にあたる。縄文時代早期末から続く縄文海進の影響により、遺跡の高地化が進むこととなる。前期になると、土器の文様が次第に装飾的になっていき、徐々に生活が豊かになり、余裕が生まれてきたことがうかがえる。また、縄文時代前期の遺構や遺物を持つ遺跡は、前後の時代に継続性を持つ遺跡が多く見られる。

市内で出土している前期最初の土器型式である木島式土器は、大鹿窪遺跡や滝戸遺跡、大中里坂下遺跡などから小破片が見つかったりだけで、この土器期の遺跡の有無は明確にはなっていない。これに続く清水ノ上Ⅱ式土器については、箕輪B遺跡から見つかっている（写真2-13、15）。箕輪遺跡は大岩明倫保育園（大岩）北側の山裾に広がり、中央の小川を挟んで西側をA遺跡、東側をB遺跡としている。発掘調査に伴って、箕輪B遺跡からは、早期前半の集石土坑二基と炉穴一基、前期の清水ノ上Ⅱ式を伴う竪穴住居が一基見つかっている。前期の前葉から中葉までの遺物を伴う遺跡は急激に減少することとなる。

市内の前期の遺跡は、前期末の諸磯b式が出現する頃から遺跡数が増えてくる。代表的な遺跡としては小塚A遺跡や代官屋敷遺跡があげられる。

小塚A遺跡は、羽鮒丘陵の西側斜面の平地に旧石器時代から縄文草創期・早期・前期にわたって営まれた芝川地区を代表する遺跡である。

前期の遺構としては、二棟の竪穴住居跡や陥し穴跡・土坑跡が発見された（図2-7、写真2-16・17）。竪穴住居跡は径四、五mのほぼ円形で、第二号住居跡の床面からは蠟石で作られた耳飾りであ



写真 2-13 箕輪 B 遺跡発掘調査全景



写真 2-15 箕輪 B 遺跡土器出土状況



写真 2-14  
箕輪 B 遺跡出土土器（清水ノ上Ⅱ式）

る珠状耳飾（写真2-18）が見つかっている。縄文前期の諸磯式土器の出土量は市内の同時期の遺跡の中で最多である。また、関西系の土器型式である北白川下層式土器（写真2-19）の出土も見られることから、広いネットワークを持ち始めたことをうかがい知ることが出来る。土器の胎土から、交流を始めたばかりの北白川下層Ⅱb式の頃は搬入品と考えられるものが目立つが、Ⅱc式の頃には在地化し始めていることがうかがえる。このことから、関西との交流も確たるものになってきたことがわかる。

代官屋敷遺跡は、西富士道路の出入口付近（小泉）の小高い丘陵に広がる縄文早期・前期の遺跡である。遺跡からは、諸磯b式土器を伴う前期の方形の住居が一棟見つかっている。方形の住居は前期後半に特徴的な住居形態で、関東からの影響が当時の富士宮にも及んでいたことがわかる。それだけでなく、小塚A遺跡同様、関西系の土器の出土もみられることから、東西に広い範囲で交流を行っていたことがわかる。また、ほかにも中期初頭の五領ヶ台式土器を伴った竖穴住居跡も見つかっている。

小塚A遺跡・代官屋敷遺跡では中期初頭の遺物量は少なくなり、それ以降の利用は見られなくなる。環境により適した場所に人々が移動していったものと考えられる。



写真 2-19  
小塚A遺跡出土土器  
(諸磯式・北白川下層式)



写真 2-18  
小塚A遺跡出土珠状  
耳飾

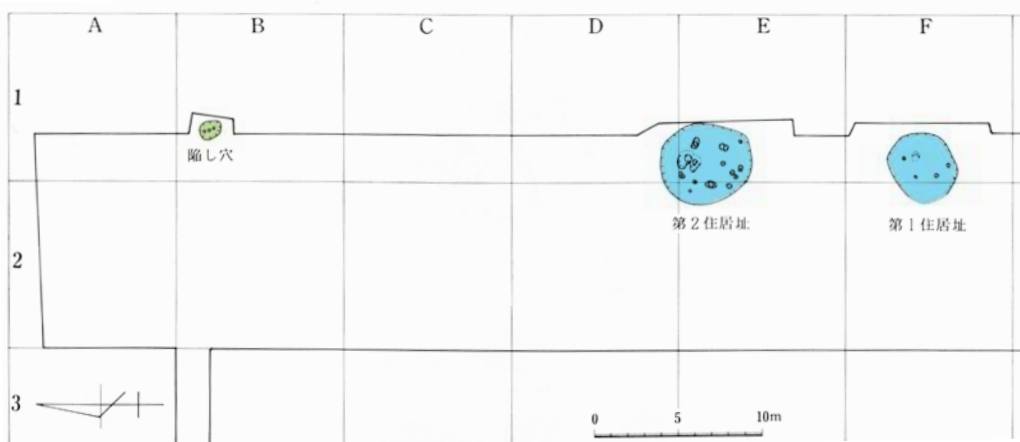


図 2-7 小塚A遺跡1区平面図 ■ 竖穴住居跡 ■ 陥し穴



写真 2-17 小塚A遺跡竖穴住居



写真 2-16 小塚A遺跡調査区遠景

## 第六節 富士宮市の縄文時代中期・後期

縄文時代中期は、今から五五〇〇年前から四五〇〇年前にあたる。多数の住居で構成される大規模集落が作られるようになり、人口が最も多くなった時期である。非常に装飾性の高い土器が多く作られ、縄文文化の最盛期と考えられる。

富士宮市には中部高地の文化が流入してくる時期である。中期後葉になると、富士山の側火山の活動が活発になり、火山活動の影響により、市内の集落遺跡（住居跡）数が減少していく。富士山の火山噴火による影響で、集落から祭祀への土地利用の転換がみえてくる。この傾向を示す遺跡としては、千居遺跡が顕著である。ほかにも、滝ノ上遺跡や滝ノ上遺跡などでも同様の様相が見られる。

縄文時代後期は、今から四五〇〇年～三二〇〇年前にあたる。四三〇〇年前の後期初頭に、気候的に冷涼となる時期があり、これによって中期までの集落の在り方や墓の在り方、社会構造や精神文化などが変化を起こした。後期後半には、北海道や東北地方北部などで、副葬品をたくさん持つような特別な墓が作られるなど、従来のイメージにあるような単純な平等社会とは異なる状況が見えるようになる。

縄文時代中期～後期の主な遺跡としては、箕輪A遺跡・上石敷遺跡・上谷戸遺跡・大中里坂下遺跡・滝ノ上遺跡・滝ノ上遺跡・千居遺跡、南原遺跡・柚野辻遺跡があげられる。

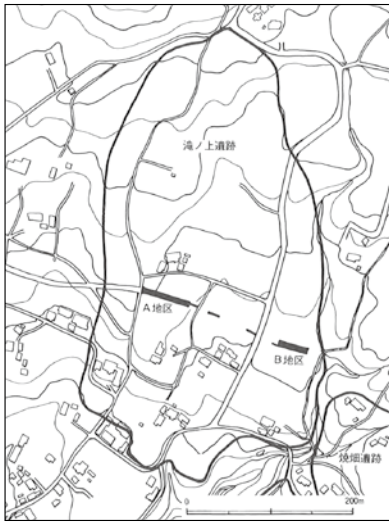


図 2-8 滝ノ上遺跡位置図

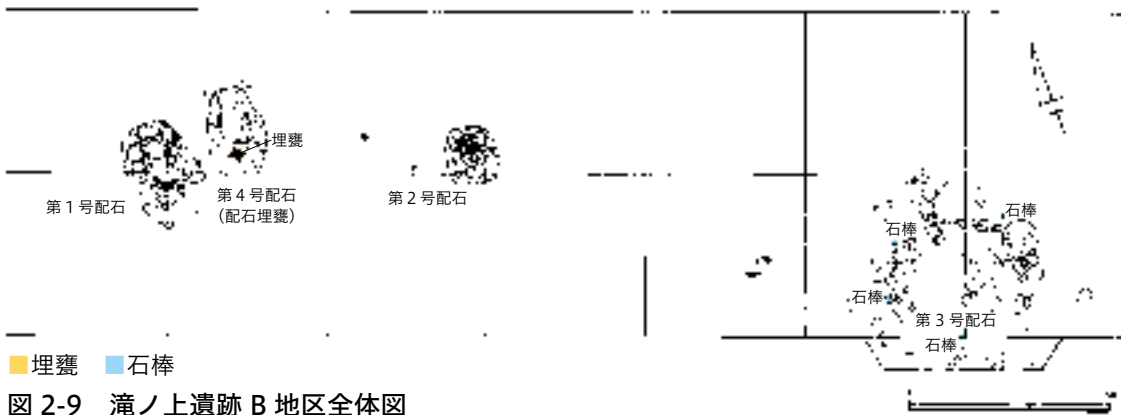


図 2-9 滝ノ上遺跡 B 地区全体図



写真 2-22 滝ノ上遺跡出土土器  
(曾利式・加曾利 E 式)



写真 2-21  
上谷戸遺跡出土土器  
(井戸尻式)



写真 2-20  
上石敷遺跡出土土器

後期になると、富士山の火山噴出物（曾利そりのスコリア）が富士山南東に降り注ぎ、曾利式期の噴火活動から逃れた集団が富士山西南麓に移動する。その結果、堀之内式期ほりのうちしきにかけて新たな活動が見られるが、立地は限定的で後期中葉にかけて文化は衰退を始める。

上石敷遺跡は、元富士根南公民館（小泉）の南側の緩やかな斜面に縄文から弥生・古墳・古代と続く複合遺跡である。縄文早期の集石土坑跡三基の上層に、中期の集石跡三基と集石土坑跡三基が築かれていた。集石跡は五〜六mの範囲に礫れきが散布した状態で広がっており、そのうちの一基には人為的に壊された土偶どぐう（写真2-20）が据えられていた。また、集石土坑跡は焼土が積まれたり、大きな扁平石を蓋ふたにしたりなど、明らかに祭祀的構造が感じられるものである。そこから北に二〇mほど離れて、径四m程の円形竪穴住居跡が見つかっている。五本の柱穴と中央には中期初頭の五領ケ台式土器の胴部が埋設炉まいせつろの炉体として据えられていた。

上谷戸遺跡は、富士養鱒場内（猪之頭いのむち）を水源とする芝川の右岸から西へ広がる縄文中期の遺跡である。水源に近い平地から中期前半の井戸尻式土器（勝坂式）一個体が、焼土の中に割れた状態で出土した（写真2-21）。この土器は四個の大きな把手とってが特徴で、最初に発見された遺跡から「多喜窪重文タイプ」と称されており、関東西部から甲府盆地を主体にして分布している。遺跡は芝川沿いに、南原遺跡・柚野辻遺跡・千居遺跡と点在する遺跡群の北端にあたり、関東や中部山岳への文化交流の通過点だった遺跡と考えられる。ほかに人体を模した把手も出土している。

滝ノ上遺跡は、旧杉田ゴルフクラブ（杉田）の南側一帯に広がる縄文中期（四五〇〇年前ごろ）を中心とした遺跡である（図2-18・9、写真2-22〜24）。丘陵の上下に配石跡が見られ、丘陵の上には中期前半の配石跡三基が築かれていた。丘陵の下の平地には中期



写真 2-25 滝戸遺跡出土土器  
（左：曾利式、右：堀之内式）



写真 2-23 滝ノ上遺跡配石埋甕（曾利式）



写真 2-26 滝戸遺跡出土埋甕（曾利式）検出状況



写真 2-24 滝ノ上遺跡 B-3 配石遺構

後半の配石跡四基が築かれていたが、その内の三基は土墳墓<sup>どこうぼ</sup>であった。三mほどの長円形の穴が掘られて、その上に人頭大の礫を積み、また、半分に分かれた土器を覆い被せたものも見つかっている。さらに、径5mほどの環状に築かれた配石の四隅には割れた石棒<sup>せきぼう</sup>が置かれ、火を焚いた跡も見つかっている。非常に祭祀的な遺跡と言えるだろう。

滝戸遺跡は、市立富士宮第三中学校（野中）の校庭を中心に潤井川まで広がる大遺跡で、縄文・弥生・古墳時代にまたがる複合遺跡である。遺跡発見は、昭和初年前後の岳南考古学会の遺跡踏査によるものと伝えられている。

縄文時代では前期から遺物量が増えて、中期の後半、曾利期に大いに栄える遺跡である。石囲い炉を中心に据えた竪穴住居跡四棟が円形に並び、その上層に径一五mほどの円形配石跡が築かれていた（図2-10、写真2-25・26）。そのなかに四〜五mの小配石が配置され、埋甕<sup>うめがめ</sup>や土壇<sup>どこう</sup>、焼土が発見された。配石跡は北へ二〇〇mほど向かった潤井川のほとりまで及んでおり、遺跡の全面にいくつかの配石が築かれていたと考えられる。曾利期の住居廃絶と配石の構築は、富士山麓一円に共通するあり方で、近年では富士山の噴火との関連もうかがわれている。その後、後期前半の堀之内式期に再度、大規模な配石跡が築かれている。中期の配石が面的に広がっていたのに対して、土壇を覆うように礫を積み重ねて塚のような配石への変化が見られる。

千居遺跡は、縄文中期後半に営まれた遺跡である（図2-11、写真2-27・28）。大石寺<sup>たいせきじ</sup>（上条）の北側の緩やかな丘陵の上に、二〇数棟の竪穴住居跡が重なって発見された。竪穴住居跡は径五〜六mの円形で、直径四〇m程の広場を中心にして馬蹄形<sup>ばていけい</sup>に築かれていた。住居の重なりからごく短い間に二度の建て替えがあり、広場を中心に



写真 2-27 千居遺跡出土土器（曾利式）



図 2-11 千居遺跡平面図

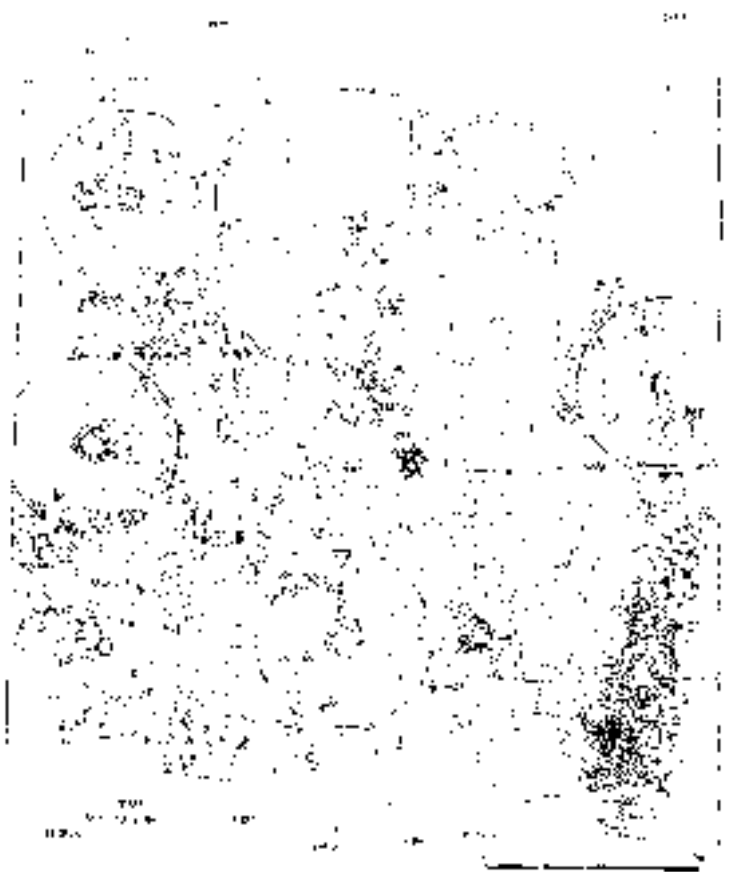


図 2-10 滝戸遺跡第2調査区 3面全体図

一〇棟前後の竪穴住居が建てられていた縄文集落の一つの形を知ることができた。これらの竪穴住居跡は富士山の火山灰に埋もれており、富士山の噴火で「ムラ」が存続できなくなったものと考えられている。

その後、「ムラ」の跡には長さ四〇m以上の二基の列石や、径三〜五mの円形配石六基、立体配石などが築かれたことが明らかになっている。千居のムラから去らなければならなかった人たちが、生活の安泰を願って「マツリ」の場を作ったと考えられ、二基の列石跡は富士山に対して防波堤のように並んでいることから、初期の富士山信仰も想像されている。

南原遺跡は、富士川と芝川の合流地点を望む丘陵の上に、竪穴住居と配石や土壙が築かれた遺跡である（写真2-19〜31）。縄文中期後半のごく短い間に住居の構築と廃絶がなされ、その後配石が築かれており、千居遺跡と同様のあり方をしている。竪穴住居跡は五m×四mほどの長円形で八本の柱穴が深く掘られ、壁ぎわには住居廃絶後に掘られた径一mほどの土壙跡が二基重なっている状態が発見された。河原石を弧状に並べている一五基ほどの配石跡が確認され、配石の下には数十基の埋甕や土壙が重なって掘られていた。埋甕には底を割つたり、穴を開けたりする土器が多く、霊などの存在を意識したものと考えられ、甕の一部に骨片が検出された例があることから集団墓地的な性格が考えられている。

富士宮市域では、中期末から後期前半までに富士山噴火という大きなイベントがあり、人々の生活スタイルに影響を与えた結果、数多くの祭祀遺構が形成されることとなる。

後期中葉の加曾利B式の頃になると急激に遺跡数が減少し、さらに後期末の後期安行式の頃になると大中里坂下遺跡や辰野遺跡で少量の遺物が確認できるのみとなる。清水天王山式土器と安行式土器が主体であり、凹線文系の土器が少量混ざるような形である。



写真 2-30 南原遺跡出土土器（曾利式）



写真 2-28 千居遺跡空撮



写真 2-31 南原遺跡埋甕検出状況



写真 2-29 南原遺跡完掘状況

## 安養寺の土偶

杉田にある安養寺あんようじに一体の土偶どぐうが所蔵されている。この土偶は、杉田中村遺跡すぎたなかむらから出土したものと伝わっている。

土偶とは、縄文時代に作られた土製の人形で、ハートやミミズク形のものや遮光器土偶しやうこうきなどがあり、大半は女性を表しており、神聖で呪術的なものと考えられている。特に東日本で多く発見されている。

安養寺の土偶は側頭部と両手が欠けているが、ほぼ完全な形で残されている。土偶は祭祀行為さいしなどで打ち欠くことがあるため破片で出土する例が多く、このようにほぼ完全な形で見つかるのは非常に珍しく、静岡県内ではほかに一例（川根本町上長尾遺跡出土遮光器土偶）があるのみである。

幕末に安養寺の裏側の用水の工事を行った際に出土したと伝わっており、この辺りからは縄文土器が表採されることから、縄文時代の遺跡包蔵地となっている。円形の顔を貼り付け、胸には乳房があり下腹部が膨らんでおり、女性を象かたどっているものと考えられる。体の文様は縄文時代後期の土器の特徴を有している。

この土偶は縄文人たちにとって、多産と豊穰ほうじやうを祈る地母神ちぼしんの象徴で祈りを込めた存在だった可能性が指摘される。

富士宮市にとって貴重なものとして、昭和五七年（一九八二）に富士宮市指定有形文化財に指定された。

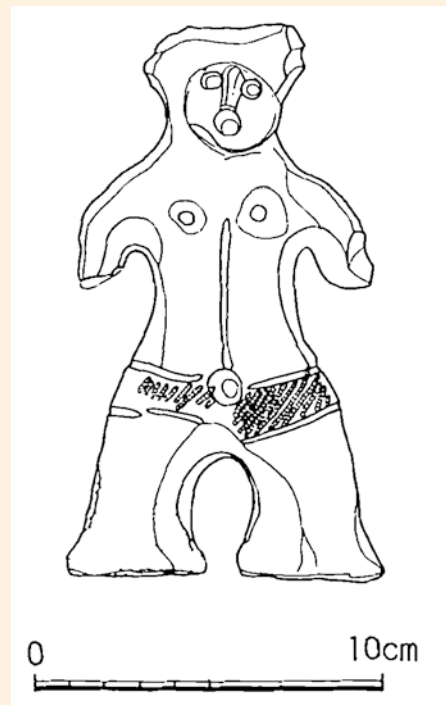


写真 2-32 安養寺の土偶（安養寺蔵）・実測図

## 第七節 富士宮市の縄文時代晩期

縄文時代晩期は、今から三二〇〇年前から二四〇〇年前にあたる。晩期になると富士山の火山活動が活発になり、遺跡数は激減する。市内の数少ない晩期の遺跡としては、辰野遺跡・柚野和平遺跡があげられる。

柚野和平遺跡は、上柚野の芝川の右岸の台地上に位置する遺跡である。これまで本発掘調査が行われたことはないが、表採や畑の耕作の際に安行式・大洞式の土器が採取されており、遺跡の存在は確認されている。

辰野遺跡は、重林寺（大岩）東側の丘陵の山間を流れ出る滝沢川東岸の緩やかな斜面に広がる縄文晩期の遺跡である（写真2-33、35）。調査は滝沢川の出口の一〇〇mほどの小範囲で実施され、清水天王山式土器・安行式土器・大洞式土器や石器がコンテナ三箱分出土した。出土土器の大半は静岡市で出土する清水天王山式土器で、古手のものが主体を占めており、遺跡の年代としては後期末期〜晩期初頭と考えられる。

柚野和平遺跡からは大洞、A式の土器片が分布調査の際に見つかったとされており、これが縄文時代最後の土器になる。

晩期後半から弥生時代初頭までの地層は、大沢スコリア層と呼ばれる硬いスコリアの地層であり、この層は市内では無遺物層となる。この間、富士山の噴火の影響で遺跡は断絶し、噴火が落ちつく弥生時代前期まで遺跡は見られなくなる。



写真 2-33 辰野遺跡発掘調査遠景



写真 2-34 辰野遺跡出土土製耳飾



写真 2-35 辰野遺跡出土土器

## 自然科学的分析II 放射性炭素年代測定

— 遺物や遺構の年代をどうやって明らかにするのか? —

発掘調査では、いろいろな科学的な手法を用いて、出土遺物や遺構などを分析している。その一つに、遺物や遺構が使われた年代が何年前か数値化する手法として、放射性炭素年代測定 (radiocarbon dating) が用いられる。

安定同位体の炭素<sup>12</sup>Cの放射性同位体である<sup>14</sup>Cが自然界において、一定の比率で存在している。動植物が生きている間はその存在比率は一定のままだが、死後は存在率が徐々に減少していく。放射性炭素<sup>14</sup>Cの半減期が五七三〇年であることを利用することで、年代測定を行うことができる。

放射性炭素年代は、BP (before present or before physics) という単位が用いられ、核実験による放射線の影響を受ける前の一九五〇年を起点としている。一九七〇年代末には加速器で放射性炭素<sup>14</sup>Cを直接数える手法 (AMS法) が使われるようになり、測定の精度や範囲が格段に上がった。さらに過去の大気中の炭素<sup>14</sup>C濃度の変動が明らかになってきたため、<sup>14</sup>C年代を樹木年輪と合わせ較正して実年代を推定するようになってきた。本文での年代も較正年代で記している。

富士宮市内でも史跡大鹿窪遺跡や滝戸遺跡、史跡富士山の発掘調査で実施されている。214ページでは、縄文時代の分析結果についてまとめている。



写真 2-36 放射性炭素年代測定用の AMS 装置 (小林謙一氏提供、東京大学総合研究博物館)



写真 2-37 年代測定の前処理作業の様子 (小林謙一氏提供)



図 2-12 放射性炭素による年代測定について (国立歴史民俗博物館提供)